

# 日本語学習者によるワープロ文書の誤用漢字は 「同音漢字の誤変換」なのか —非漢字圏日本語学習者の誤用表記分析—

松本スタート洋子

## 要旨

本稿は、英語を母語とする日本語（EJ）学習者が書いた日本語ワープロ文書中にある文字表記の誤用分析を取り扱い、EJ学習者が日本語入力で直面する問題点を検討した。誤字データは、1997年から2000年にEJ学習者が書いた作文から抽出し、合計340の誤用表記を採取した。分析の結果、EJ学習者による誤用漢字には（1）同音、同訓漢字の誤変換、（2）「音韻の誤入力」に続く「漢字形の認識エラー」が原因で、意図される漢字と形・音・義の全てが異なる誤字、（3）音韻以外の要因から生じた誤字があることが分かった。

誤用漢字の範疇には入らなかったが、1字違った平仮名の誤入力が原因で漢字変換されていない平仮名列が別の誤用分類を構成していることも分かった。これにより、EJ学習者の誤用表記は、同音漢字の誤変換の他に、第二言語の音声、音韻習得や漢字視覚認知の分野で検討する価値のある様々な問題を包含していることが示唆された。

【キーワード】 同音異字、日本語ワープロ、非漢字圏の日本語学習者、誤用分析、漢字変換されていない平仮名列

## 1. はじめに

1970年代の後半に開発された日本語ワープロが急速に普及し、キーボード言語としての日本語が一般化してから日本人の漢字を巡る状況は大きく変わった。従来の自分の手で漢字を「書く」（漢字生成）という書字行動に加えて、筆記具の日本語ワープロが提示した漢字のリストから意図する語を「確定する」（漢字認識）という書字行動が定着した。教育機器としてのコンピュータの使用に必要な日本語入力の習得は、コンピュータ利用による日本語教育（CALL）やインターネット、電子メールの教育利用の活発化で、日本語学習者にとって無視できない日本語スキルの一つになってきている。

本稿は日本語を外国語として学習する非漢字圏の学習者が日本語ワープロで書いた作文中の文字表記に関する誤用分析を取り扱い、学習者が日本語入力で直面している問題点を明らかにすることを目的とする。本稿では、これまでデータ数が少ないと言われている非漢字圏の学習者のうち、英語を母語とし、日本に滞在したことがない<sup>(1)</sup> 同一学習レベルにある日本語学習者（以下、EJ）の書いたワープロ文書中の誤用表記に焦点を当てた分析を行った。

## 2. 先行研究の課題と本研究の分析の目的

### 2-1 日英ワープロの教育利用に関する先行研究

英語ワープロの教育利用に関する先行研究の多くは、完全な文章校正機能によって、下位作

業にあたるスペリングなどの面倒な作業から開放された英語母語者の書き手が、作文構成に関連する上位作業に集中できるため、ワープロの使用で作文の質や生産性が向上し、早くきれいに書けるなどの利点を報告している (Daiute 1985; Lam & Pennington 1993 など)。一方、日本語ワープロの使用が、日本語学習者の文書作成にどのような影響を与えるのかについて調査した研究は僅かであり (Otake 1987; 大隈 1992 など)、日本語ワープロを組み込んだ学習指導法 (後藤他 2001) の検討はまだ緒についたばかりである。日本語母語者の成人 (以下、L1) が通常、無意識なレベルで自動的に行っている「意図する語の発音を入力する」という入力初期段階での作業が、日本語学習者にとって問題であることが、日本語学習者用のキーボード入力支援システムの開発を目指す先行研究 (土屋 2001) によって明らかにされている。しかし、これらの先行研究では、「音韻の誤入力」に焦点を当てているために誤用の原因となりえる音韻以外の要因は考慮されていないようである。

## 2-2 本研究の分析の目的

もともと L1 の書き手を対象に開発された日本語ワープロは、文字入力を行いながら繰り返し漢字のパターン認識を行って意図する漢字を選び、それを最終的に自己モニターできる能力が暗黙の前提となっている。従って、変換後の漢字が文脈に合っているかどうかのモニター行動を支援する機能はあまり充実しておらず、L1 の書き手でも同音異義語や異字同訓 (以下、**同音異字**) の誤変換をしないことはワープロ文書作成の基本となっている。音節構造が単純な日本語の語彙には同音語が多く、ワープロに「イコウ」と入力すると 20 種類以上の同音異字が提示されることを例にとっても、同音異字の誤変換が L1 の書き手だけの問題ではないことが推測される。しかし、この問題を扱った日本語教育での先行研究は見当たらず、この点も課題といえる。

また、筆者の教室指導の経験から、EJ 学習者の書く誤用漢字には、同音異字とは誤用の原因が異なる漢字が少なからずあると思われるのである。例えば、日本語ワープロの漢字変換では、入力中に平仮名の誤りがあっても、その平仮名列に相当する漢字があれば文脈に一致しなくても変換候補として提示される。それらの漢字のどれかが確定されてしまうと、書き手が意図していた漢字と字形、意味、発音の異なる漢字が文書に残る。読み手にとって面倒なこれらの誤字は、漢字の部分再生現象が多い手書きの誤用漢字とは違う新しいタイプの誤字である。学習者による日本語入力では、L1 の書き手のように同音異字の誤変換だけが問題になっているのかどうかを確かめることは、日本語ワープロを組み込んだ今後の日本語教育における漢字指導法を検討するためにも必要である。そこから得られた結果から、同音異字の誤変換を防ぐための漢字の弁別トレーニングが必要なのか、それとも初級の漢字学習の段階から「音と意味」、「音と形」の関係の強化で語彙力の増強を目指し、漢字熟語を語彙として音声で学習させる指導も必要なのかが明らかになれば、漢字の教案作りにも役立つ知識となるだろう。そこで本稿では、3-3 に示した 8 つの分類基準を設定し、その誤用分布から以下の点を明らかにするために EJ 学習者の誤用表記の分析を行う。

1. EJ 学習者による日本語ワープロの使用において、書き手の下位レベル (スペリング) に関連する問題はあるのか。
2. もし、問題があり、それらが書き手の負担となっているのであれば、同定された

誤字は、EJ 書き手が下位作業で直面している問題点を反映するものなのか。また、それらの誤字には類型できるだけ共通項があるのか。

3. EJ 学習者による誤用漢字は、同音異字の誤変換だけなのか。

### 3. 調査の概要

#### 3-1 インフォーマント

本稿のインフォーマントは、1997 年から 2000 年の 3 年間にイギリスのエディンバラ大学に在籍し、初級後半レベルの「日本語 A」を正規に受講した 43 人の EJ 学習者である。37 人がイギリス英語、2 人がアメリカ英語の母語者だった。残りの 4 人はイギリスで中等教育を受けたタイ語(n=1)、ドイツ語(n=2)、中国語(n=1)とイギリス英語のバイリンガルだった。平均年齢は 21.3 歳(R:19-27, SD=1.928)で、性別は男(n=21)と女(n=22)の比率がほとんど同じだった。このうち、90.7% (n=39)が日本での滞在経験が一度もなく、81.4% (n=35)が日本語学習時間 205 時間以内の日本語初級学習者だった。

#### 3-2 データ収集の方法

本稿の誤用データベースは、上記のインフォーマントが同一の日本語ワープロソフト<sup>(2)</sup>を使用して書いた 43 の作文から抽出した誤用表記を含む。作文の平均の行数は 56.4 行で平均の字数は 1,693 字だった。このデータは Corder (1974) のいう L1 言語背景を同じとし、同年代グループで同じ学習過程にあるものから抽出された均一性のある誤用サンプルの条件を満たしている。作文は、日本人に紹介したい自分の国の「代表的な行事」、「有名人」、「芸術やスポーツ」というトピックから、個々に自分の書きたい行事や、スポーツ、有名人などを 1 つ選ばせ、それを詳しく記述させることを狙った。辞書はオンライン、オフラインとも使用を認めた。学習者は週に 1 回、1 時間のコンピュータ授業に 18 回出席した後で、この課題を提出した。次に、3-3 に示した 8 種類の分類基準に従って合計 366 の誤字を採取したが、1 つの作文の中に繰り返し現れた 13 の誤字は 2 回目以降の出現では数えないこととしたので最終的に合計 340 の誤用表記となった。

#### 3-3 誤用の分類基準

##### 3-3-1 表記別分類

表記別分類は「平仮名」、「片仮名」、「漢字」、「漢字＋送り仮名」の 4 項目と、漢字と算用数字の混用（例えば、一八九〇年）などを扱う「その他」を加えた 5 項目に従って誤用表記を収集した。

##### 3-3-2 品詞別分類

品詞分類は名詞、動詞、形容詞、助詞、副詞、接続詞、分類不可能（意図する意味も理解できない歪みの著しい部分）の 7 項目によって行った。

##### 3-3-3 字義に関する表記別の追跡可能性 (traceability)

誤字から本来意図しようとする意味を辿れるかどうか（意図する意味が分かる，分からない）の 2 項目で分類した。

### 3-3-4 誤用漢字の下位分類化

「語の発音が同一」の漢字，「語の発音が異なる」漢字，日本語にない造語などを扱う「その他」の 3 分類とした。

### 3-3-5 誤字に含まれるエラーの種類

誤入力された音韻に関して余剰，欠落，交換，混成語，構成要素の順序，視覚的エラーの 6 種類を設定した。これに，1 語中 2 つ以上のエラーが含まれている「ミックス」を加えた 7 項目で分類した。

### 3-3-6 誤字を構成するモーラの種類

現代日本語で許容される 5 種類の音節構造（窪菌 1999）V， CV， CCV， CVC， CVV に含まれる長母音，短母音，直音，拗音，促音，撥音の 6 種類と，1 語中 2 つ以上のモーラや視覚問題との混合で生じているエラー（ミックス），入力した語の音韻は正しいが，分割の問題などで誤字となったエラー（語レベル）の 8 項目で分類した。

### 3-3-7 音韻の誤入力が生じた位置

活用のない名詞などの誤字は，第 1 モーラ，第 1 と最終以外のモーラ，最終モーラの 3 分類とし，動詞などの活用部分に誤字があるものは別枠で「活用」項目を設定した。これらの 4 項目に，上記のどの項目にも入れられない誤字を「その他」として加えた 5 項目で分類を行った。エラーの位置の判断は，短母音の長音化，またはその逆の誤字については，以下のように統一して分類した。

1. 第 1 モーラにある短母音が長母音化した場合は，母音のある第 2 モーラではなく，エラーが生じたモーラの位置（第 1 モーラ）で分類する。
2. 第 2 モーラにあるべき長母音が欠落している誤字は語の中ほどの位置（第 1 と最終以外のモーラ）で分類する。

### 3-3-8 字音と字訓の誤用の分類

このカテゴリーでは字音，字訓，無関係（片仮名語など），ミックス（湯桶読みなどの音訓 2 つで読む語など）の 4 種類で分類した。

## 4. 分析結果と考察

### 4-1 表記別，品詞別の誤字の分布

3-3 による分類基準で分類した 340 の誤用表記を統計ソフトの SPSS を使用して分析した結果を以下に示す。まず，表記別，品詞別の誤字数を表 1 と 2 にまとめた。

表 1 表記別の誤字数

表記	誤字数 (n=340)	
平仮名	120	(35.3%)
片仮名	51	(15.0%)
漢字	51	(15.0%)
漢字＋平仮名	99	(29.1%)
その他	19	(5.6%)

表 2 品詞別の誤字数

品詞	誤字数 (n=340)	
名詞	132	(38.8%)
動詞	125	(36.8%)
形容詞	26	(7.6%)
助詞	20	(5.9%)
副詞	6	(1.8%)
接続詞	3	(0.9%)
不明	28	(8.2%)

表音文字である「平仮名」、「片仮名」は、意図する語のスペリングが辞書の発音とずれている「音韻の誤入力」系のものだけでなく、助詞の「へ」を「え」と書くような表記の用法に間違いがある「表記法違反」系の誤字も同定した。「漢字」で書かれた語は、文中で漢字の字義が文脈に合わない、またはまったく意味をなさない漢語の同音異字や、日本語には存在しない造語と思われる漢字を誤字として同定した。「漢字＋送り仮名」は語幹の漢字と送りがなで一語となる語中に間違いを含むものを同定した。動詞や形容詞では、「ある」の否定形を「あらない」とするような明らかに文法的要因からの誤字と判断したものは、本分析の対象外とした。

#### 4-2 音韻の誤入力の位置とモーラのタイプ

表 3 に示したように、意図する語の第 1 モーラで生じた誤字 (n=25) で多かったのは、日本語が語頭で許容する音韻から予測できる直音と拗音だった。第 1 と最終以外のモーラ (中間位置) で最多だったのは直音で、その 72%にあたる誤字 (n=18) が交換エラーだった。(1) に示したとおり、原因の異なる数種類の交換エラーが同定された。例えば、よく指摘される有声音と無声音の交換 (1a. と 1b.), 意味的、音韻的に近い 2 つの語「このごろ」と「そのころ」の構成要素の交換が起こって「そこごろ」になった混成エラーと思われる誤字 (1c.), 「ず」と「づ」の書き分けに失敗した誤字 (1e.) などである。この位置で次に多かったのが、(2) に示した長母音のエラーだった。そのうち 10 字は、2a. と 2b. の例のような母音の欠落 (n=8) と余剰 (n=2) に関連する片仮名の誤字で、残りの 8 字は、全て長母音 [o:] に関するエラー (欠落=3, 交換=4, ミックス=1) だった。また、そのうちの半数が平仮名表記の「う」と「お」の書き分けに関するエラーだった。最終モーラで生じた誤字 (n=22) で一番多かったのが (3) にあるような長母音の余剰 (n=8) と欠落 (n=4) に関するものだった。

- (1) a. し**が**し, b. の**ひ**なやむ, c. そ**こ**ごろ, d. サンフランシ**ツ**コ, e. つ**ず**けました  
 (2) a. スパ**ス**ター, b. T シャー**ー**ツ, c. よ**こ**さん (洋子), d. きよ**お**ぎじょう, e. 諸説 (小説)  
 (3) a. 裏ばなし**い**, b. いっしょ**う** (一緒), c. 映画など**う**, d. 石**い**, e. ディズ**ニ**

表 3 音韻の誤入力の位置とモーラのタイプ

	短母音 直音 (n=18)	長母音 促音 (n=126)	撥音 (n=41)	拗音 (n=37)	ミックス (n=8)	語レベル (n=10)	ミックス (n=56)	語レベル (n=44)
第 1 モーラ (7.4%)	2	14	3	0	0	6	0	0
中間位置 (19.1%)	3	25	18	10	4	3	2	0
最終モーラ (6.5%)	1	3	12	1	4	0	0	1
活用部分 (33.5%)	11	62	5	25	0	1	10	0
その他 (33.5%)	1	22	3	1	0	0	44	43

- (4) a. 基つく, b. 結婚式をあたました, c. 読みにかい, d. さけんた時, e. 記述ひながら  
 (5) a. 出って, b. 演奏した, c. 言た, d. 可愛がた, e. 通うて, f. 打ち勝ちた  
 (6) a. めったんに, b. 数年か (間)

表 3 の 6 種類のモーラを含む 8 基準を音韻の誤入力が起こった位置で積み上げたグラフを図 1 に示した。活用部分の誤字で最も数が多かったのは直音の交換エラー (n=29) で、そのうち 86.2% が (4) に数例を挙げた動詞だった。2 番目に多かった直音の欠落エラーは、「行ました」に見られる送り仮名を書き始める位置に関するものが主だった。清音と濁音の交換エラーは、直音の誤用全体の 41.7% を占めていた。数は少なかったが、「～と言われる」のように意味的に似た 2 つの漢字「言う」と「呼ぶ」が混同されて現れたと思われる混成エラーもあった。直音の次に促音に関するエラーが目立った (n=25) が、これらの誤字の品詞は全て動詞だった。(5) は音韻的な誤字というよりは、動詞の活用に関する問題としてみるべきだろうが、例を挙げておくと、促音の余剰を含む (5a., 5b.) ものが 12 字、欠落に関して (5c., 5d.) 8 字、他のモーラと交換されたエラー (5e., 5f.) が 5 字だった。(6) は、余剰と欠落が同数だった撥音の誤字例である。「ミックス」と「語レベル」については 4-3 で記述する。

図 1

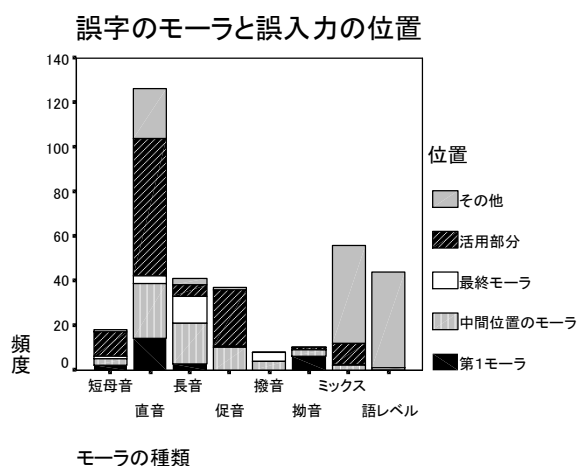
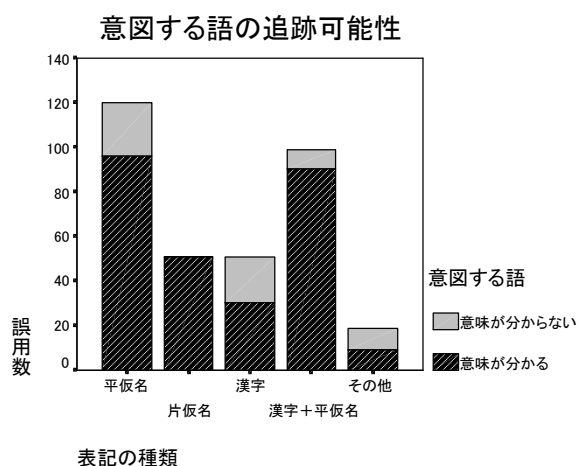


図 2



### 4-3 表記別による意図する意味の追跡可能性

書き手が意図した意味を誤字から推測できるかどうか（意味の追跡可能性）について表記別に分析したものを図2のグラフにまとめた。書き手の伝えようとする意味が分かったものは誤字全体の81.2%（n=276）で、分からなかった誤字は18.8%（n=64）だった<sup>(3)</sup>。

- (7) a. イギ<sup>ル</sup>ス, b. ホムレス, c. パ<sup>ッ</sup>プ, d. ハリ<sup>オ</sup>ッド, e. 彼の<sup>カ</sup>ラクター  
(8) a. ちょ<sup>う</sup>と休む, b. 残虐<sup>こ</sup>い, c. むず<sup>が</sup>しい, d. びよ<sup>お</sup>き, e. や<sup>く</sup>そば  
(9) a. <sup>り</sup>こんしゃいたになる, b. <sup>小</sup>さいな<sup>か</sup>田舎の町, c. 怪獣に<sup>う</sup>ったろうとした  
(10) a. 代表<sup>昨</sup>（作）, b. <sup>復</sup>雑（複）, c. <sup>第</sup>一（第）, d. <sup>間</sup>単（簡）, e. <sup>出</sup>帆（版）  
(11) a. アフガニスタンの<sup>前</sup>山を旅行している, b. <sup>ぎ</sup>が<sup>じ</sup>ゅう<sup>か</sup>マンドラは, c. <sup>卓</sup>話会

(7)に数例をあげた片仮名の誤用表記（n=51）の意味は全て理解できた。平仮名による誤字は、(8)が意味の取れる単一エラーによる平仮名列（n=96）, (9)は、意味の分からなかった平仮名列（n=24）で、エラーのタイプがはっきりと1つに特定できないほど歪んだ複合的なエラーを含むタイプの誤字だったことを示す例である。例えば、9b.の確かな原因は誤字からは分からないが、「小さい」と「いなか」に関する文節の境界の問題、「なか」を「中」と漢字で書こうとしていた、漢字を書くときに平仮名「いなか」をコピーして消し忘れたから書かれたなど、いくつかの原因が推測できる。このことから、表音文字である平仮名と片仮名の誤字は、(9)のような複合タイプの少数のエラーを除けば、誤字でも意図する意味が伝わる事が分かる。

L1の書き手にはまず考えられない(8)のような誤字は、平仮名で書かれた誤字の約半数（49.2%）を占めており、EJ書き手の日本語入力における問題点の1つを反映していると考えられる。例えば、「鶴」を<sup>づ</sup>る、「反逆」を<sup>はん</sup>き<sup>ゃ</sup>くと入力した子音の有声化、または無声化に関する誤字や、辞書的な発音とのずれから短母音の長音化が起これ「他」を<sup>ほ</sup>う<sup>か</sup>、「運転手」を<sup>う</sup>んてん<sup>し</sup>ゅうとした平仮名列もあった一方で、「う」で書くはずの長音[o:]を「お」で書いた表記の用法違反（2d.）や、長音[o:]を小文字化した「せんと<sup>う</sup>てき」など、音韻以外の理由で生じた誤字も含んでいる。「運転手」を<sup>う</sup>んてん<sup>し</sup>ゅうと書いたエラーは、1つの作文中に合計で9回出現している。これを書いたEJ学習者の誤用傾向に注目してみると、「距離」を<sup>き</sup>ょう<sup>り</sup>、「ちょっと」を<sup>ち</sup>ょうとと書いた例に見られる語末、非語末位置にある短母音の長音化、促音と長音の特殊拍同士による交替現象<sup>(4)</sup>（cf. 窪菌, 1999: 166）が見られた。つまり、この誤字は手が滑って「u」を2度打ちしたタイピングミスにより偶然書かれた誤字ではなかったことが分かる。

一方、漢字変換された誤字（n=51）のうち、意味が推測できる漢字（n=30）の66.7%（n=20）が(10)にあるような同音異字で、残り33.3%（n=10）は、1字違いの平仮名の誤入力で他の漢字に変換されたもの（n=5）や視覚的問題を含むと思われる漢字（n=5）だった。これらの漢字については後述する。(11)は、意図する漢字、または平仮名列の意味が全く分からず、なぜそのように書かれたのか推測できなかった41.2%（n=21）の誤字の例である。例えば、11a.の「前」と「山」という漢字1語ずつの意味は分かるが「前山」という漢字熟語は存在しない。2つの漢字の間に助詞のノを入れて「前の山」としても文全体の意味は理

解できない。言い換えれば、EJ 学習者の書いた誤字を読み慣れた教師でも、意図する語の発音が分からない誤字からは、正用の語を推測するのは難しく、一度漢字変換されてしまうと、その誤字から意図されていた語を辿るのは困難なことがうかがえる。

#### 4-4 誤用漢字の下位分類

誤字全体の 50.3% (n=171) を構成する「平仮名」と「漢字」の誤用を、字音と字訓で読み別に分析すると、56 件あった字音の 64.3% (n=36)、68 件あった字訓の 45.6% (n=31) が同音異字以外のエラーだった。表 4 は、誤字全体の 15% (n=51) を占めている誤用漢字の発音が、意図された語と同音かどうかで下位分類したものである。

表 4 誤用漢字の下位分類による分析

誤字数 (n=51)		
同音異字	20	(39.2%)
同音異字以外の漢字	14	(27.5%)
判断不可能	17	(33.3%)

意図する語と発音を同じくするものは誤用漢字の 39.2%で、そうでない漢字の合計 60.8% (n=31) をかなり下回っている。(11a.)と(11c.)を例として示した 17 の誤字は、同音異字かどうかの判断ができなかった。しかし、同音異字と判断された誤字の 100%が意図されている意味が辿れる漢字だったことを考えると、これらの漢字が同音異字である可能性は低いと考えていいだろう。同音異字ではないと判断できた誤用漢字で(12)は音韻の誤入力を主原因として生じたもの、(13)は音韻以外の要因が絡んでいるか、2つ以上のエラーを原因として書かれたもの、(14)は手書きの誤用によく見られるものである。

- (12) a. 政界中 (世界中), b. 愛憎 (情), c. 諸説 (小説), d. 師事 (詩人)  
(13) a. 結婚を洩仕込む (申し), b. 英田 (間), c. 受け手いる (て), d. 蟹座 (癌)  
(14) a. 息話まる (詰), b. 持に (特), c. 下真面目 (不), d. 彫刻阪 (板)

(12)は、単一のエラーを含む意味の取れる平仮名列の例である(8)のバリエーションで、初期段階の平仮名誤入力のために書き手の意図しなかった漢字に変換されている漢字である。例えば、12a.は、「世界中」と書こうとして、se-i-ka-i-ju-u と入力した結果、提示されたいくつかの漢字の中から、意図する漢字熟語の第2要素「界」を共通の構成要素として持つ「政界」を選んで確定してしまった誤字と考えられる。これらの漢字は誤変換の一種ではあるが、正確には「音韻の誤入力」に続く「パターン認識エラー」であり、漢字のパターン認識が失敗しただけである同音異字の漢字の誤変換とは同一ではない。また、(12)の誤用漢字は注意して観察しないと、一見、同音異字の誤変換と思われる漢字が多いことも見過ごすべきではないだろう。(13)の誤字には、変換時の分割の問題 (13a.-c.)を含む誤字や、英語を翻訳する過程での間違い (13d.)など、音韻以外の要因が原因で書かれたものが含まれていた。例えば、13d.は、「ジェームス・ディーンの母は蟹座から死んだ」とい



う 1 文中にあったが、これを書いた EJ 学習者は、*James Dean's mother died of cancer* と日本語で書こうとして、*cancer* をオンライン辞書で調べた際、提示された語彙リストをすべて類義語と思い込んで意味の逆引きを怠り、病気の「癌」ではなく星座の「蟹座」を選んでコピー、貼り付けをしてしまったのである。(14) は手書きの誤字を見慣れた教師には珍しい誤用ではないだろう。しかし、意図する語の音韻を「正確に」入力した結果が文書に残る日本語ワープロの特徴を考えると、(14) の誤字は手書きの誤字とは違うことが分かる。例えば、14-a. の「息話まる」の誤字の字形は意図する「息詰まる」とよく似ているが、この 2 語の誤字の間に共通する音韻は全くない。14-a. をワープロで書くには「息」と書いた後でハナシ、またはワと入力して「話」を得る必要がある。しかし、なぜ 1 語を分解して書くという手間のかかることをしたのか誤用分析からは解明できない。

## 5. まとめ

上記の誤用分析から、平仮名の誤用表記の半数近く (59/120) が、以下に挙げる理由によって平仮名 1 字の誤入力となり、「漢字に変換されずにテキスト中に残った平仮名列」として 1 つの誤用表記分類を構成していることが明らかになった。これらの誤字は、(1) EJ 学習者の発音と辞書的な発音とのずれからくる音韻の問題、(2) 平仮名の書き分けに失敗した平仮名表記の用法違反、(3) 視覚的な問題、(4) 混成語エラーなどの意味的な要因、の 4 つの共通項により下位分類することができた。また、誤用漢字の下位分類の結果から EJ 学習者による誤用漢字は、同音異字の誤変換による誤字を上回る同音異字以外の漢字で書かれた誤字があることが分かった。それらの漢字の多くは、(1) から (4) の理由で「漢字変換できなかった平仮名列」のバリエーションと考えられる。つまり、誤入力された平仮名列に該当する漢字が表示され、書き手が目指していた漢字と形態、音韻、意味が違う漢字を選んだことに気づかずに、その中の 1 字を確定してしまったタイプ（認識エラー）の誤字である。さらに、同音異字の誤変換ではない漢字の中には「意味の混同」や「造語」など、書き手が意識的に書いたと思われる誤字や、英日オンライン辞書で提示された日本語を誤って選択し、コピー、貼り付けをした「英語入力だけで書かれた翻訳による誤字」があることも分かった。以上により、日本語習得中の EJ 学習者の誤用表記には、発音を同じくする漢字の誤変換の問題だけでなく、今後、第二言語の音声、音韻習得に関する中間言語や漢字視覚認知の分野で詳しく調べてみる価値のある様々な問題を包含していることが示唆された。しかし、Ellis (1985 : 53) も指摘しているように誤用分析の限界は、その分析から推測したいくつかのエラー原因の中から何が主原因となったかまでは絞り込むことはできないということにある。今後の研究では、痕跡として残された誤用からではなく学習者の心的状態を推定し、EJ 誤用表記の背後にある情報処理の過程を明らかにできるような手法を用いて、本稿で明らかにされた問題点を検討する必要があるだろう。

謝辞： 本研究中「意味の追跡可能性」の評定者としてご協力くださった大西涼子さん、山田陽子さん、本執筆の段階で貴重なコメントをいただきました窪蘭晴夫先生に感謝申し上げます。また、丁寧かつ有益なコメントをくださった査読委員の先生方に心よりお礼申し上げます。

## 注

- (1) 土屋 (2001 : p. 377) は、欧州言語話者のデータが少ないこと、またアジア出身者とは日本語学習の動機や学習歴に違いがあるため、音韻的な誤入力から母語の影響を分析するには来日前で日本語学習歴の短い欧州の学習者データが必要だと指摘している。
- (2) 本稿の EJ 学習者は、長文の文節変換には適さないシェアウェアのワープロ「JWP」を使用して通常、単語レベルでの漢字変換を行っている。
- (3) 資料の順序を変えて行った日本語教師 3 人 (日本語母語者) による評価結果は、83.3% という高い一致率を示した。
- (4) このエラーは同一文脈上に長音の代入を引き起こす前後環境がないため代入エラーとは言えないが、特殊拍間での交替が環境条件なしでも生じることは L1 でも指摘されている (窪菌, 私信)。

## 参考文献

- (1) 大隈紀和 (1992) 『小・中学校の日本語入力』教育開発研究所
- (2) 窪菌晴夫 (1999) 『日本語の音声』岩波書店
- (3) 後藤寛樹・深澤のぞみ・濱田美和 (2001) 「留学生向けコンピュータ教材の開発とその使用」『日本語教育』110 号 日本語教育学会
- (4) 土屋順一 (2001) 「外国人のための日本語キーボード入力支援システムの母語別カスタマイズ」『電気通信普及財団 研究調査報告書』15:373-380
- (5) Corder, S. (1974). Error Analysis. In J. Allen and S.Corder (eds.). *The Edinburgh Course in Applied Linguistics*, Vol. 3. Oxford University Press.
- (6) Daiute, C. (1985). Do Writers Talk to Themselves? In S. Freeman (Ed.), *The Acquisition of Written Language*, Norwood, New Jersey: Ablex Publishing Corporation.
- (7) Ellis, R. (1985). *Understanding Second Language Acquisition*. Oxford University Press.
- (8) Lam, F.S. & Pennington, M.C. (1993). The computer vs. the pen: A comparative study of word processing in a Hong Kong secondary classroom. *Perspectives*. 5,63-75
- (9) Otake, Y. (1987). Japanese word processing as an instructional activity for university students learning Japanese as a foreign language. Unpublished doctoral dissertation, The University of Texas at Austin.

(エディンバラ大学)